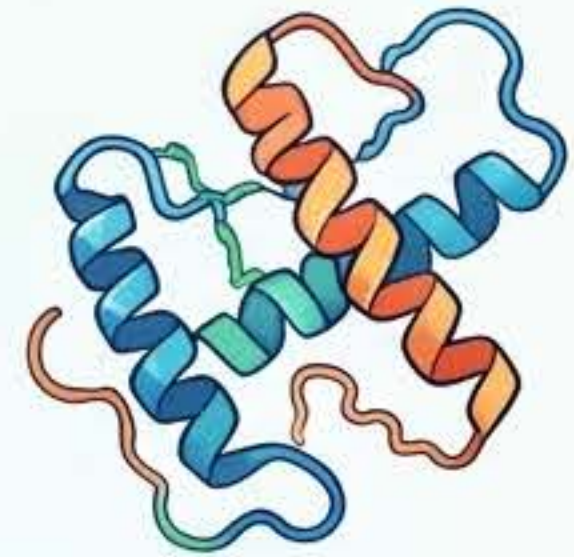


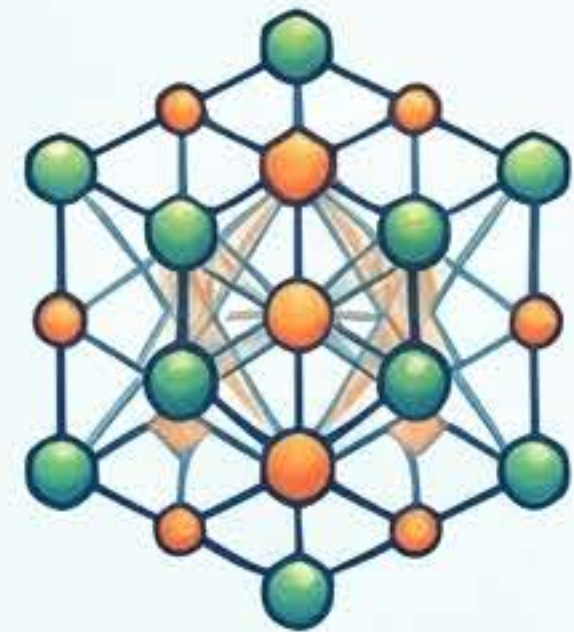
AI for Science時代の知財戦略：自律的な発見と「発明者性」の証明

2019年から2026年：予測から自律的な「生成」へ

プロテイン構造の
予測となえる生成



AlphaFold



MatterGen

2022

GPT-Rosalind



実験の自律化が進んでいる

2026

2024

2023

AIは「発明の主体」ではなく「道具」

USPTO等のガイダンスでは、AI生成物における
人間の「着想 (Conception)」の有無が厳格に問われる。



世界共通の基準
「AIは発明者になれない」



日本
(知財高裁, 2025):
AIを発明者とする
出願の却下を維持



米国
(Thaler v. Vidal):
発明者は自然人に
限定 (AIはTool)



欧州
(EPO, DABUS事件):
「機械は発明者で
はない」と明示

最優先戦略：IP Provenance Infrastructureの構築

「誰が・いつ・何を」の証拠化を自動化



AI利用ログ



プロンプト



IP Provenance (知的財産来歴)



候補の選択理由



実験による
検証記録



独自データ

AIモデル

実験結果

人間の判断

競争優位は「独自データと証拠」に宿る

モデルがコモディティ化する中、高品質な
私有データと寄与証拠を持つ組織が勝利する。